

※以下は、本書内容の一部であり、無断転載等を禁止します。

ウェブ閲覧用ですので、体裁など、実際の書籍とは異なる部分があります。

クリスマスローズ

—
—
—
○
八

一

夥しい歴史の教区の前で

ありふれた情熱は踏みしだかれ

悉く色褪せてしまう

殉教者たちの笑い声が

冷やかな失意を

ジヨークにすりかえてゆく

二

高鳴る心臓の鼓動に

他人の足音が重なるたびに
敬虔な夢は枯ればむ

言葉も朽ちてゆくものだ

狂おしい光の旋律

燭を燻らす闇の美しき誤謬

三

解熱の作用を私は訝る

すべてを知り得るはずもなかったが

古の時祷書を繰り

作業はつつがなく完了した

偽りの萌芽を掻き置く

もはや一滴の血の比喩もない

四

刻み込まれた言葉と記憶の

不確かな幻影を携えて

恐怖は時代を下り

凧ぎかけた心を威嚇する

燃え上がる鴉の群れを追い立てる

鄙びた砲声のように

五

色褪せた時の流れのなかで

燭光に照らされた

食卓ほどの広さの世界は

惨めに汚れた傷口を誇っているだけだ

赤銅色の意志も

鎮めるべき魂もなく

六

芥子の種ほどの星彩を

仰ぐこともない

風を孕んだ戎克の帆のような

空漠の裏には
寸断された暮色の雲翳だけが
ただじつとその身を潜めている

七

柁が仄かに薫る夕刻には
虫たちが水を求めて飛来する
紫黒色の結実に
祈りを捧げ
捨て札に秘められた囁きの
明証と寓意を褒め称し

八

虹の法悦にも浴した自ら

人々は嘲る

熱り立つ諸世紀の

いかなる至福も

神聖なものの意味を

共感をもって知ることがない

九

落葉を掻き集め

下草を雀り

私は不毛を饗宴として試みる

冷えはじめた大地に

椅子を置き

微かに遠雷を聞きながら

一〇

水脈引く闇に導かれ

再び朝まだき目醒めるための

口誦は祈りであり

呪咀である

荒んだ無上の波の喧騒と

静寂のなか

一一

目に映るものの

生成を待つ

私は生と死の背立を信じない

見分けがつかないのだ

三冊の本を

束にして読むように

一二

驕慢な天使たちが

一房の営為から

絶えざる旋律で搾りだす

その毒を

すべて飲み干しても

癒されることはないだろう

(後略)

クリスマスローズ

1996年3月28日発行

著者 佐久間紀次

発行所 沖積舎